

## たじみん昼話 98

### 常識を疑うことが新発見を呼ぶ

最近、桔梗の自宅の網戸には、夜になるとカブトムシやクワガタムシがくっついて騒いでいる。しかし朝になると、下に移動して寝ているのかと思わせるほど大人しくしている。この現象から、カブトムシは夜行性なんだろうと、漠然とその生態を理解していた。そのことは、大抵の人が普通だと認識しているだろう。しかしそれを普通ではないと考えて研究し、その成果がアメリカの学会誌に掲載された小学生が日本にいた。埼玉県の小学6年生柴田亮さんだ。

柴田さんは2019年から2020年に渡って、自宅のシマトネリコにやってくるカブトムシの生態を研究した。柴田さんは162匹のカブトムシに番号をつけて識別し、各個体の餌場滞在時間の変化を毎日調査したそうだ。その結果、深夜零時の活動ピーク以外の昼間でも、半数以上の個体が活動することを確認した。即ちカブトムシは夜行性であると、限定できない事実を発見したのだ。

カブトムシにとってメジャーな生活の場であるクヌギ以外の植物種で、夜行性が崩れることを明らかにしたことは、新発見(山口大プレス)なのだそうだ。

この研究結果は、アメリカの生態学専門誌『Ecology』に掲載され高い評価を得た。この投稿を行った共同研究者の小島(山口大講師)さんは、柴田さんの2点に感心したという。第1点が、誰も気にもとめなかったカブトムシの新生態に疑問を持ち、仮説を立てて研究したこと。第2点が、2年間ひたすら粘り強く研究した研究姿勢。確かに、だれも疑わないことを疑うことや、シーズン中ほぼ毎日深夜まで粘り強く研究することは、普通の人にはできないことだ。

虫の夜行性は、天敵から狙われるリスクを減らすための生存戦略であり、生物学的に合理的な生態だ。実際今回の実験場では、カブトムシが食べられた跡があったらしい。それなのになぜカブトムシは、そのリスクを冒してまでこの活動を続けたのだろうか？今後の成果が楽しみだ。

多治見高生の皆さんも、周囲の当たり前を、今一度疑って研究してみよう。新発見があるかもしれない。